

〈原著論文〉

0・1歳児を対象とした運動プログラムの導入が保育者の 自己評価に与える影響

The effect of the introduction of an exercise program for 0-1 year old children on the self-evaluation of childcare workers

岸本 みさ子¹

要旨

共通の運動プログラムに取り組み、子どもを観る視点を可視化することによって、保育者同士の協働が円滑に進み、子どもの身体発達の状況についても把握しやすくなり、保育の質向上に寄与するのではいかと考える。本研究では、共通の運動プログラムを導入し保育の振り返りを行うことによって、保育者自身がどのように自己評価をするのかについて検討した。その結果、保育者同士の連携が取りやすくなり、自分自身の保育についても詳細な振り返りが可能になることが明らかとなった。このことから、保育者自身が自分自身の保育を振り返る視点を可視化することの重要性が確認された。

キーワード：乳児，身体づくり，運動プログラム，自己評価

Infants, body building, exercise program, self-evaluation

I はじめに

保育の質の向上は喫緊の課題として挙げられている。保育の質を向上させるために、様々な研修が行われ、保育者は日々学び続けているが、保育の中には様々な要素が含まれており、なにを基準に保育の質を評価していいのかといった部分については、多くの課題があるのではないかと考える。

上山ら(2021)は、保育者の初期キャリアの課題に対する支援として子ども理解の枠組みを活用した個別の実践支援に取り組んでいる。この調査では、保育経験5年以内の保育者に対し、メンタルモデルの概念を用いて作成した「子ども理解の枠組み」を活用し、子ども理解の枠組みを提示し、それを用いて面接を行い、調査対象児の変化について振り返りを行った。その結果、対象児への理解を可視化したことで、保育者が対象児をどのように理解していたのかを保育者自身が自覚することができ、対象児についてもっと理解したいという意欲が向上したという結果を報告している。保育実践は、「子ども理解」を起点として計画・実践が展開し、省察を通して新たな「子ども理解」に

繋がるという循環的な営みであり、そのサイクルを繰り返すことで保育者の専門性が向上し、保育の質も向上していくと考えられたため、「子ども理解」を可視化する実践支援は、省察を促進し、保育実践の向上に一定の有効性があることを示唆している。

また、田島(2019)は保育における振り返りのプロセスについての一考察として、子ども理解・対話・可視化に着目して研究している。その結果、「焦点を当てると見えてくることがある」という意見が多数あったと報告している。更に振り返ることや対話することの重要性を挙げる保育者が多かったことから、振り返りや対話の方法を意識していくことが重要であるとしている。また振り返る場面において、振り返りやすい、対話しやすいツールを生み出していくということも大切であると述べている。このように、振り返りを行う際にも、どの視点で振り返りを行うのかという枠組みが必要であると言える。

さらに上村(2022)は、保育者と子どもの関係を可視化したことによって、焦点化・意識化する視点の幅も広がることが明らかになったとし、

1 Misako KISHIMOTO 千里金蘭大学 教育学部 教育学科

受理日：2023年9月1日
査読付

視覚的に捉え難い保育者と子どもの関係性を可視化することで、子どもとの関係構築だけでなく保育者の意識変容なども含めた保育者自身の資質向上に資する可能性を示唆している。これらのことから、振り返りの視点を可視化することが重要であることがわかる。

「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」の議論のとりまとめ(2020)では、保育所保育の営みの持つ特徴として総合性と一体性を挙げ、「保育所保育においては、乳幼児期の子どものその発達の特性に基づき、子どもへの援助や保育の環境、子どもの経験、育みたい資質・能力などを、いずれも実践場面では様々な要素が分かちがたく結びついて成り立つものとして捉え、保育が行われている。特に“養護と教育の一体性”は、保育所保育の特性として、保育所の制度的な位置づけに関する議論とも連動する形で早くから議論が重ねられ、今日多くの保育関係者に自明のこととして受け止められている。一方で、こうした総合性・一体性に基づく保育の具体的な実践に関しては、それをどのように意識化・言語化するかということとあわせて模索が続くとともに、現場によっては未だ理解の不足や混乱が見られる場合もあるなど、現状においても課題があることが指摘された。」と、保育の具体的な実践を可視化することの難しさを課題として挙げている。

本研究では、保育の営みの中で行う子どもの身体づくりに焦点を絞って考えていきたい。子どもの身体に関する課題は多く挙げられており、体力低下の課題の中には、姿勢保持が難しい、体幹が弱い、よくこけるといったような課題が挙げられる。岸本ら(2021)が保育者を対象に子どもの身体について実施した質問紙調査結果においても、「姿勢が悪い」「体幹が弱い」「転倒時に手が出ない」「歩く習慣がない」「バランスが悪い」「アレルギーが多い」「生活習慣の獲得が難しい」といった課題が明らかとなっている。

子どもの体力低下の課題については、文部科学省が2012(平成12)年に「幼児期運動指針」を策定し、保育の場で必要な運動経験とは何かについて発表している。幼児期運動指針は、1日60分以上楽しく体を動かすことが重要であるとし、運動あそびの時間を設けることや、掃除や荷物を運ぶといったお手伝い活動も含めて、様々な動きを経験する機会を提供することが重要であるとしている。本指針には、3歳児から5歳児を対象とした活動が

提案されている。このように、3歳児以上の身体活動については、文部科学省から目安となる指針が発表されている。そのため、この指針を基に、子どもの身体の育ちを観る観点を作成することは可能であると考えられる。

しかし子どもの育ちを考える際、3歳から身体づくりが始まるわけではない。3歳の段階で既に身体活動における個人差は大きく、子どもの身体づくりを考えると、乳児期からの継続した身体活動の経験が必要であると考えられる。現段階においては、3歳以上の身体づくりのための幼児期運動指針は策定されたが、3歳未満の子どもの身体づくりに関する運動指針は作成されていない。しかし前述した通り、子どもの身体づくりは、日々の継続が必要であり、乳児期から意識的に身体づくりを行う必要がある。その点からも保育者が0歳児から身体づくりを行うという意識を持つことが重要であると言える。

それらの事から、乳児を対象とした運動プログラムを導入して保育を行うことで、保育者自身が子どもの身体の育ちのポイントを意識し、可視化しながら保育を行うことができるのではないかと考える。身体の育ちを可視化することができるようになれば、保育を言語化することができるようになり、そのことが保育の質向上に繋がるのではないだろうか。

本研究では、0・1歳児を対象として考えられたWARAリズム®の運動プログラムを通して、乳児の身体発達についてポイントを押さえた上で身体づくりを行うことで、保育者自身が自分自身の保育を振り返ることができ、自身の保育を可視化することが可能になり、保育の質向上の一助になるのではないかと考え調査を行う。

II WARAリズム®の運動プログラム

今回調査対象とした保育者は、WARAリズム®の運動プログラム研修を受講している。WARAリズム®の運動プログラムとは、「赤ちゃんのための運動あそび」として開発されたプログラムである。このプログラムは、遊びながら発達を促す運動プログラムである。赤ちゃんの運動・発達に関わる理学療法士や子ども専門の体幹トレーナー、あそび歌作家がプログラム制作にかかわり、2014年に開発された。家庭や保育の場で誰でも簡単に取り入れられるように、赤ちゃんが親しみやすいわら

べうたをアレンジして作成されている。また、取り入れやすさを考えて、プログラムを1つのパッケージとして提示している。

また、この運動プログラムは、①発達の順序、②環境づくり、③遊び方・触れ合い方の3つを軸として作成されており、子育てに悩みを抱える保護者向けのプログラムとして展開されてきたが、現在では保育所や認定こども園の保育者も、乳児期の運動あそびプログラムとして導入している。

本調査では、WARAリズム®運動プログラム研修を導入している保育所や認定こども園の保育者を対象としている。各園の0・1歳児を担当する保育者全員がこのプログラムを受講しているということである。0・1歳児の担任全員がWARAリズム®の運動プログラムを習得したうえで、日々の保育の中で子どもの身体づくりに従事している。

Ⅲ 研究目的

共通の運動プログラムに取り組み、子どもを観る視点を可視化することによって、保育者同士の協働が円滑に進み、子どもの身体発達の状況についても把握しやすくなり、保育の質向上に寄与するのではいかと考える。

本研究では、共通の運動プログラムを導入し保育の振り返りを行うことによって、保育者自身がどのように自己評価をするのかについて検討する。本調査は、WARAリズム®運動プログラムの研修に参加している保育者を対象とする。

Ⅳ 調査方法

0・1歳児の担任をしている保育者で尚且つ、WARAリズム®の運動プログラムに取り組む保育者24名を対象に質問紙調査を実施した。調査はGoogleフォームを用いて、2023年2月に実施した。対象者は2022年4月から5月にかけて、WARAリズム®運動プログラムの研修を受講しており、1年間通してWARAリズム®運動プログラムに取り組んできた保育者である。

質問紙調査内容は、回答者の属性と、WARAリズム®を取り入れたことによる子どもの変化と保育者自身の変化についての質問項目を用意し、5件法と自由記述で回答を依頼した。

5件法による質問項目については、「WARAリズム®を取り入れたことにより感じる子どもの様子について」と「WARAリズム®の研修を受けて受

ける前との変化について」回答を求めた。質問項目は以下の通りである。

- 1) 子どもの様子について
 - ア. 体力が向上した
 - イ. よく動くようになった
 - ウ. 動きが安定・スムーズになった
 - エ. 姿勢が安定している
 - オ. 転びにくい・大きなケガが減った
 - カ. 集中して遊べる時間が増えた
 - キ. よく動けるようになったことで睡眠の質が変わってきた
 - ク. よく動けるようになったことで食べる意欲が増した
 - ケ. 人や物への興味関心・好奇心が旺盛になった
- 2) WARAリズム®の研修を受けて受ける前との変化について
 - ア. 子どもの動き、運動を観る視点が変わった
 - イ. 子どもが過ごす環境設定を考えるようになった
 - ウ. 運動プログラムが立てやすくなった
 - エ. 保育士間での連携が取りやすくなった
 - オ. 子どもとのコミュニケーションが取りやすくなった
 - カ. 保護者へ子どもの運動発達についてアドバイスしやすくなった
 - キ. 仕事にやりがいを感じ、保育に自信がついた

以上の項目について「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「全く思わない」の5件法で回答を求めた。

自由記述の質問項目は、「WARAリズム®に取り組む中で、気付いたことや嬉しかったこと」「上記の気づきや嬉しいことは、どう取り組んだことによって変化があったと考えるか」という2項目について回答を求めた。

Ⅴ 分析方法

5件法の質問項目については、単純集計して検討を行った。質問紙調査の自由記述回答については、テキストマイニングソフトであるKHcorder (2014)

により、語彙頻度の分析を実施するとともに、共起ネットワークを作成し、語の繋がりを分析した。また、階層的クラスタ分析を行い、語の出現パターンが類似した語の組み合わせを抽出した。

階層的クラスタ分析では、最小出現語数を2に設定し、併合水準から7つのクラスターに分類した。共起ネットワークの作成は、最小出現語数2に設定した。その際、互いに強く結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示すサブグラフ検出(random walks)を使用した。また、共起ネットワークを作成し、出現語数を2とし、Jaccard上位60に設定して分析した。

VI 倫理的配慮

Googleフォームへの回答は自由意志とした。調査に協力する場合は同意書の記入を求め、同意した場合であっても、調査結果発表以前であれば同意を取り下げることが可能であることや、調査への協力の有無により不利益は一切生じないことの説明を行った。また、調査は無記名であり、回答は研究目的以外には利用しないこと、情報は厳密に保護され、研究終了後は破棄されること、さらに個人情報やプライバシーには十分に配慮することを説明した。本研究は千里金蘭大学倫理委員会の承認を得て実施した。【承認番号：K21-010】

VII 結果及び考察

1. 回収率とその属性

質問紙調査の回答者は24名であり、回収率は100%であった。回答者の内訳は、0歳児担任が7人(29%)、1歳児担任が17人(71%)であった。(図1)。

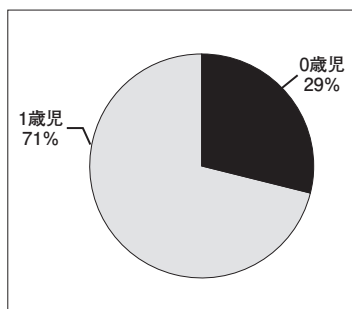


図1 担任クラス

回答者の保育士歴は、5年未満が3人(12%)、5~10年未満が8人(33%)、10~15年未満が7人(29%)、15~20年未満が3人(13%)、20年以上が3

人(13%)、という結果となった。保育士歴が浅い保育者から保育士歴が長いベテランの保育者まで回答者の中に含まれている(図2)。

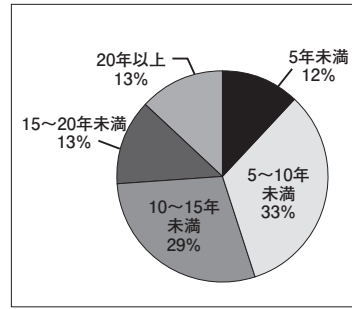


図2 保育士歴

2. 結果と考察

1) 5件法による質問調査結果と考察

5件法による質問項目については、「WARAリズム®を取り入れたことにより感じる子どもの様子について」と「WARAリズム®の研修を受ける前との変化について」回答を求めた。

①子どもの様子について

図3を見てみると、「体力が向上した」については、とてもそう思う12.5%、そう思う62.5%、どちらでもない20.8%で75%の保育者が「体力が向上した」と感じていた。「よく動くようになった」については、とてもそう思う29.2%、そう思う54.2%、どちらでもない16.7%で、83.4%の保育者が「良く動くようになった」と回答している。「動きが安定・スムーズになった」については、とてもそう思う33.3%、そう思う50.0%、どちらでもない16.7%で、83.3%の保育者が「動きが安定・スムーズ」と感じていることがわかる。「姿勢が安定している」については、とてもそう思う25.0%、そう思う41.7%、どちらでもない33.3%で66.7%の保育者が「姿勢が安定している」と回答している。「転びにくい・大きなケガが減った」については、とてもそう思う20.8%、そう思う41.7%、どちらでもない37.5%で、62.5%が減ったと感じていることがわかる。「集中して遊べる時間が増えた」については、とてもそう思う12.5%、そう思う41.7%、どちらでもない45.8%で、54.2%が増えたと感じている。「よく動けるようになったことで睡眠の質が変わってきた」については、とてもそう思う12.5%、そう思う45.8%に対し、どちらでもない33.3%、あまり思わない8.3%という結果となり、58.3%の保育者が睡眠の質の変化を感じている。「良く動けるようになっ

0・1歳児を対象とした運動プログラムの導入が保育者の自己評価に与える影響

たことで食べる意欲が増した」については、とてもそう思う16.7%、そう思う62.5%、どちらともいえない20.8%となり、79.2%の保育者が「食べる意欲が増した」と回答している。「人や物への興味関心・好奇心が旺盛になった」については、とてもそう思う41.7%、そう思う37.5%、どちらでもない20.8%で、79.2%の保育者が「興味関心・好奇心旺盛になった」と回答している。

子どもの様子の変化について、「とてもそう思う」「そう思う」の回答を肯定的に捉えているとして結果を見ると、8割以上の保育者が、「よく動くようになった」「動きが安定・スムーズになった」と捉えている。また、7割以上の保育者が「体力が向上した」「よく動けるようになったことで食べる意欲

が増した」「人や物への興味関心・好奇心が旺盛になった」と捉えていることが明らかとなった。1年間を通して、運動プログラムに取り組むという視点を持って保育を続けたことで、体力や動きについて意識的に観ることができたのではないかと考える。また、対保育者と取り組むプログラムであることから、人や物への興味関心・好奇心が旺盛になったという回答を得ることができたと考える。

②WARAリズム®の研修を受けて受ける前との変化について

図4を見てみると、「園児の動き、運動を見る視点が変わった」については、とてもそう思う50.0%、そう思う45.8%、どちらでもない4.2%で95.8%の

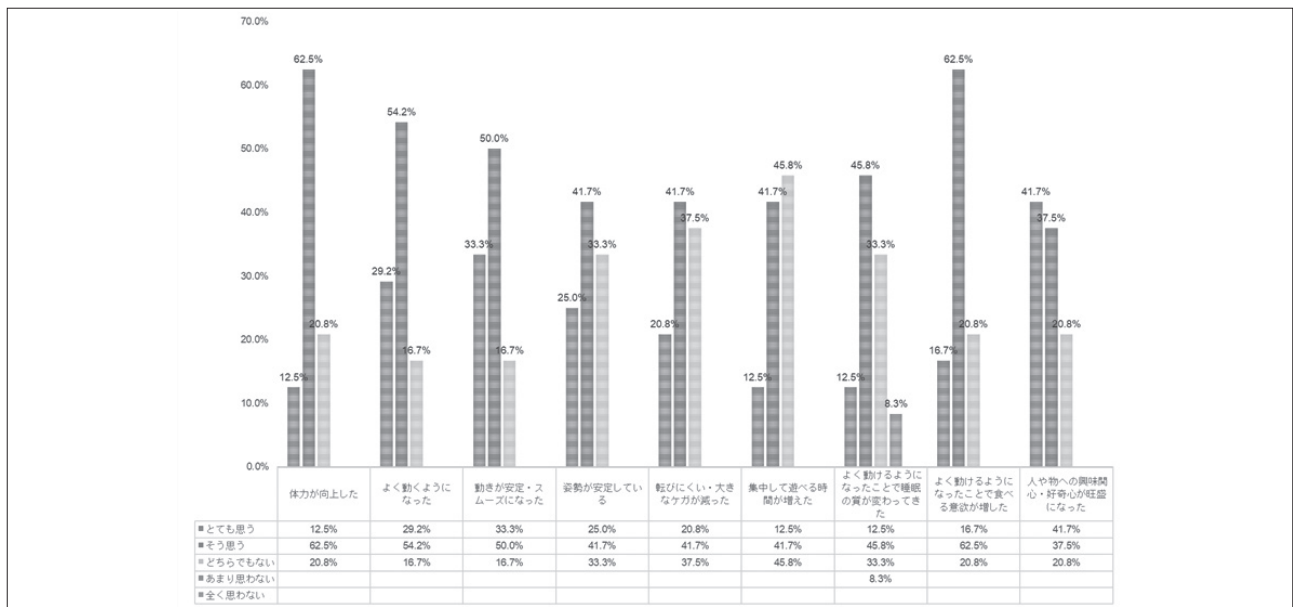


図3 WARAリズム®を保育に取り入れたことによる子どもの変化

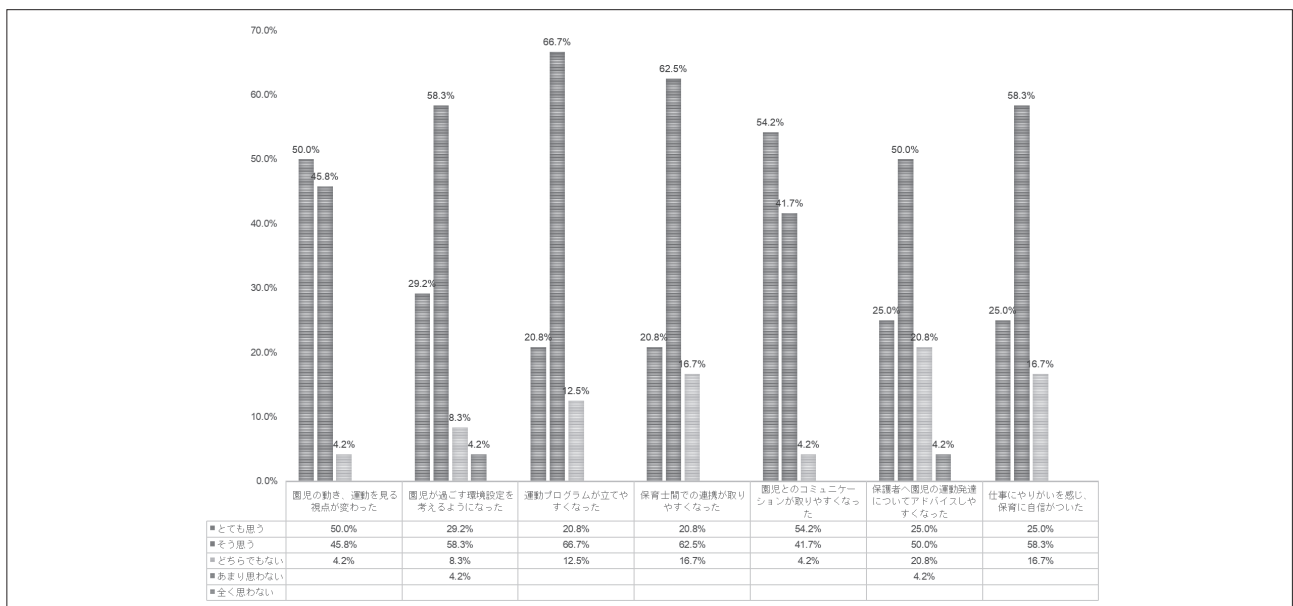


図4 WARAリズム®を保育に取り入れたことによる保育者の変化

保育者が「見る視点が変わった」と感じていることが明らかとなった。「園児が過ごす環境設定を考えるようになった」については、とてもそう思う29.2%、そう思う58.3%、どちらでもない8.3%、あまり思わない4.2%であり、87.5%が「環境設定を考えるようになった」と回答している。「運動プログラムが立てやすくなった」については、とてもそう思う20.8%、そう思う66.7%、どちらでもない12.5%であり、87.5%の保育者が「運動プログラムを立てやすくなった」と回答している。「保育士間での連携が取りやすくなった」については、とてもそう思う20.8%、そう思う62.5%、どちらでもない16.7%となり、83.3%の保育者が「連携が取りやすくなった」と回答している。「園児とのコミュニケーションが取りやすくなった」については、とてもそう思う54.2%、そう思う41.7%、どちらでもない4.2%となり、95.9%の保育者が「園児とのコミュニケーションが取りやすくなった」と感じていることが明らかとなった。「保護者へ園児の運動発達についてアドバイスしやすくなった」については、とてもそう思う25.0%、そう思う50.0%、どちらでもない20.8%、あまり思わない4.2%となり、75%の保育者は「保護者へアドバイスしやすくなった」と感じていることが明らかとなった。「仕事にやりがいを感じ、保育に自信がついた」については、とてもそう思う25.0%、そう思う58.3%、どちらでもない16.7%となり、83.3%の保育者が「やりがいを感じ、保育に自信がついた」と感じていることが明らかとなった。

保育者自身の変化については、子どもの様子以上に肯定的な結果を得ることができた。9割以上の保育者が「見る視点が変わった」「園児とのコミュニケーションが取りやすくなった」と回答し、8割以上の保育者が「環境設定を考えるようになった」「運動プログラムが立てやすくなった」「保育士間での連携が取りやすくなった」「仕事にやりがいを感じ、保育に自信がついた」と回答している。WARAリズム®運動プログラムを導入し、乳児期の運動に関する視点を得たことで、自分自身の保育を振り返ることができたと考えられる。また、自分自身の保育を振り返ることで、自分自身の実践が可視化され、その結果に自信を持つことができ、仕事にやりがいを感じることもできたと推察できる。このことから、振り返りの視点を明確にすることはとても重要であることが確認できた。

2) 自由記述による質問調査結果と考察

自由記述による質問紙項目は「WARAリズム®に取り組み中で、気付いたことや嬉しかったこと」「上記の気づきや嬉しいことはどう取り組んだことによって変化があったと考えるか」という2項目について回答を求めた。

①WARAリズム®に取り組み中で、気付いたことや嬉しかったこと

調査によって得られた自由記述回答をテキストマイニング用のKHcorderソフトにより、語彙頻度の分析を行った。その結果、分析対象ファイルに含まれる全ての語（総抽出語数）は、899（使用語数377）語、何種類の語含まれるかを示す異なり語数は273（使用語数205）語が抽出された。

上位の単語には「子ども」「WARAリズム」「体」「保育者」「見る」「出来る」「動き」「姿」「子」「自分」といった語が挙げられた。その他、出現する語とその出現回数は表1の通りである。

表1 気付いたことや嬉しかったこと

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	21	お子さん	2	触れ合い	2
WARAリズム	12	横	2	食事	2
体	12	音楽	2	深まる	2
保育者	9	感じる	2	増える	2
見る	6	関わり	2	多い	2
出来る	6	喜ぶ	2	登る	2
動き	6	嬉しい	2	動物体操	2
姿	5	興味	2	発達	2
子	4	曲	2	聞く	2
自分	4	緊張	2	歩行	2
おんぶ	3	近く	2	毎回	2
安定	3	今	2	目	2
言う	3	参加	2	様子	2
座る	3	姿勢	2	落ち着く	2
思う	3	自ら	2	流れる	2
持つ	3	自身	2	力	2
時間	3	取り組む	2		
動かす	3	取り入れる	2		

共起ネットワークによる共起語を可視化した結果を図5に示した。強い共起関係ほど太い線で描画され、出現語が多い語ほど大きい円で描かれている。Jaccard係数上位60に設定した分析では、「子ども-WARAリズム-保育者」「食事-座る-時間-落ち着く」「お子さん-緊張-自ら-音楽-発達-動かす」「曲-嬉しい-近く-流れる-参加-興味-関わり-増える-目-思う」「姿勢-安定-歩行-感じる-今-物-登る-おんぶ-力-自分」「毎回-喜ぶ-動物体操-取り入れる-自身-聞く-深まる-様子-触れ合い-取り組む-出来る」といった語に高い共起関係が示されていた。

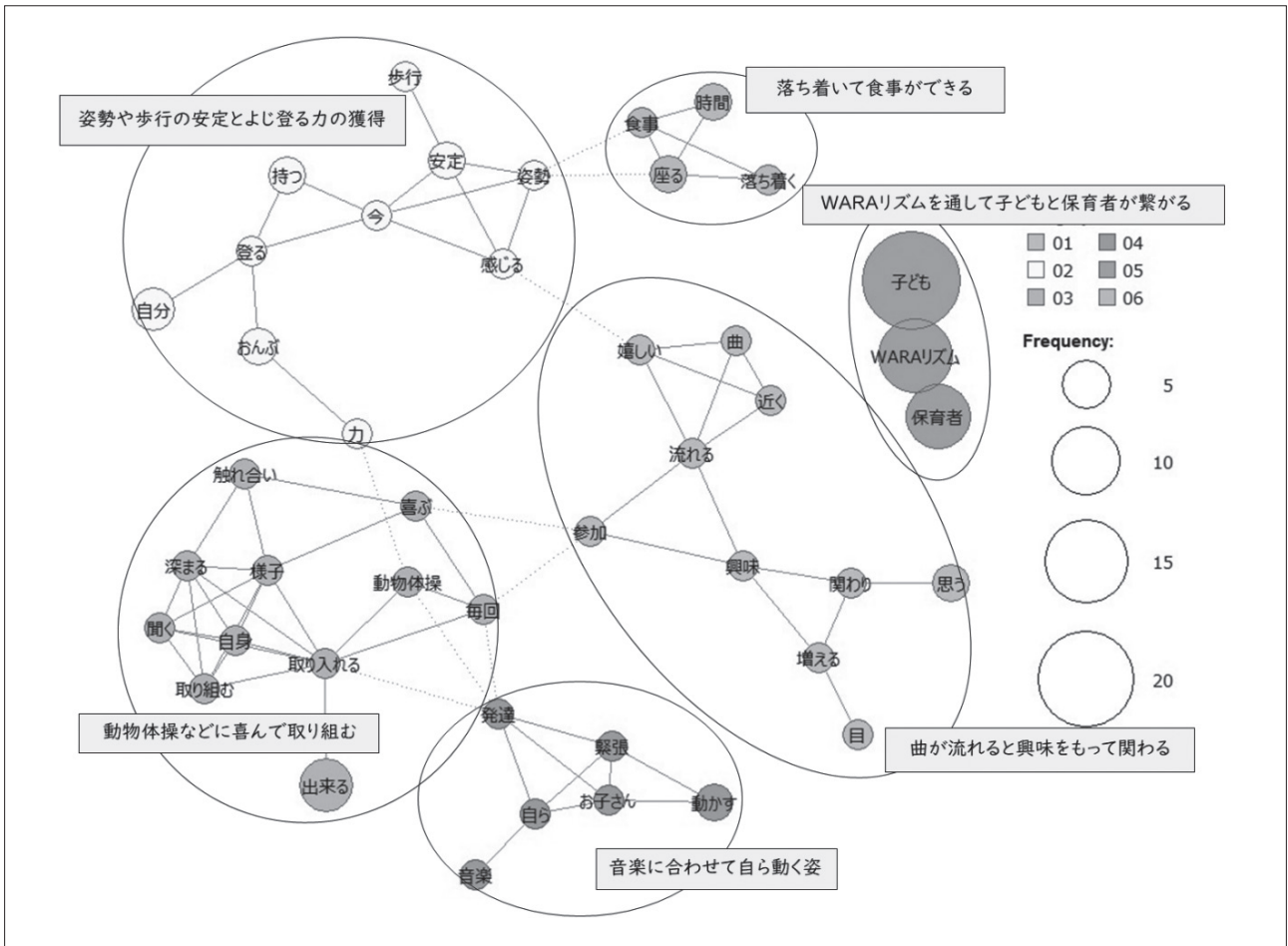


図5 WARAリズム®に取り組む中で、気付いたことや嬉しかったこと（共起ネットワーク）

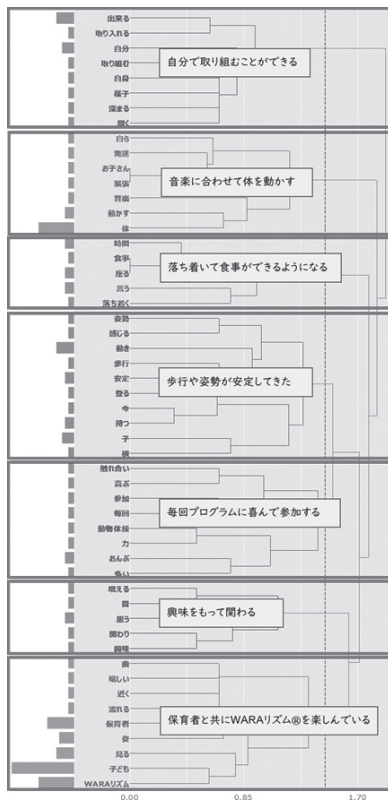


図6 WARAリズム®に取り組む中で、気付いたことや嬉しかったこと（クラスター分析）

それぞれの文脈を読み取り、カテゴリ化すると、「WARAリズムを通して子どもと保育者が繋がる」「落ち着いて食事ができる」「音楽に合わせて自ら動く姿」「曲が流れると興味をもって関わる」「姿勢や歩行の安定とよじ登る力の獲得」「動物体操などに喜んで取り組む」という6つのカテゴリに分類することができた。

また、語の出現パターン類似した語の組み合わせを抽出する階層的クラスター分析を試みた結果、7つのクラスターに分類できた（図6）。

各クラスターの文字内容を分析すると、「自分で取り組むことができる」「音楽に合わせて体を動かす」「落ち着いて食事ができるようになる」「歩行や姿勢が安定してきた」「毎回プログラムに喜んで参加する」「興味をもって関わる」「保育者と共にWARAリズム®を楽しんでいる」という結果となった。

保育者は、子ども達がWARAリズム®運動プログラムに積極的に自ら関わる姿を喜び、その結果、姿勢の安定やよじ登る力の獲得や落ち着いて食事ができるようになったという体の変化について嬉

しいと感じていることが明らかとなった。毎日のプログラムとして意識的にWARAリズム®運動プログラムに取り組むことで、子ども達に浸透し、継続的に取り組むことで身体にも変化を得ることができたことに喜びを感じていることがわかる。

②上記の気づきや嬉しいことは、どう取り組んだことによって変化があったと考えるか

分析対象ファイルに含まれる全ての語（総抽出語数）は、799（使用語数341）語、何種類の語含まれるかを示す異なり語数は268（使用語数188）語が抽出された。

上位の単語には「子ども」「WARAリズム」「遊び」「行う」「取り組む」「出来る」「ハイハイ」「意識」「楽しい」「感じる」「動き」「保育者」といった語が挙げられた。出現する語とその他の語の出現回数は表2の通りである。

表2 変化の理由

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	11	いちわのからす	2
WARAリズム	6	おんぶ	2
遊び	6	その後	2
行う	5	はりにいと	2
取り組む	5	安定	2
出来る	5	運動	2
ハイハイ	4	気持ち	2
意識	4	結果	2
楽しい	4	見る	2
感じる	4	股関節	2
動き	4	考える	2
保育者	4	合わせる	2
バランス	3	今	2
感覚	3	左右	2
時間	3	姿	2
取り入れる	3	思う	2
体幹	3	少し	2
朝	3	真似	2
変化	3	積極	2
歩行	3	雪	2
毎日	3	増やす	2
		足	2
		足裏	2
		倒れる	2
		日々	2
		入力	2

共起ネットワークによる共起語を可視化した結果を図7に示した。

「保育者-姿-真似」「足裏-いちわのからす-安定-感覚-はりにいと-入力-左右-結果-運動」「日々-考える-気持ち-楽しい-取り組む」「WARAリズム-感

じる-遊び」「バランス-思う-雪-倒れる-体幹」「おんぶ-時間-増やす」「今-足-少し-見る-股関節-ハイハイ-その後-歩行-出来る-朝-意識-動き」「変化-合わせる-積極」といった語に高い共起関係が示されていた。それぞれの文章を細かく分析し、カテゴリ化すると、「保育者の真似をする姿」「足裏や左右を意識して取り組む」「日々楽しみながら取り組む」「遊びながら取り組む」「バランスを保つ体幹」「おんぶの時間を増やした」「股関節など動きを意識する」「変化に対応する」という8つのカテゴリに分類することができた。

また、語の出現パターン類似した語の組み合わせを抽出する階層的クラスタ分析を試みた結果、7つのクラスタに分類できた（図8）。

各クラスタの文字内容を分析すると、「遊ぶ中でWARAリズムを取り入れ、毎日体幹を意識する」「楽しいと思えるよう日々取り入れる」「おんぶの時間を増やす」「保育者の真似をして取り組む姿」「ハイハイや股関節などの動きを意識して見る」「足裏を意識してプログラムに取り組む」「左右差を意識して朝行う」という結果となった。

子ども達の変化の要因として、「ハイハイや股関節などの動きを意識してみる」「足裏を意識してプログラムに取り組む」「左右差を意識して朝行う」など、子どもの動きに着目してプログラムに取り組むという姿勢があった。また、遊びのなかで楽しみながら行うことで、子ども達が主体的に活動参加できるように工夫しているということも明らかとなった。WARAリズム®運動プログラムをただ提供するだけではなく、遊びのなかで取り入れながら、実施している保育者は身体づくりのプログラムとして動きのポイントも意識しながら実施したことによって、子ども達の身体に変化があったと感じていることが明らかとなった。保育者自身が遊びのなかで子ども達に獲得してほしい力を明確にして取り組むという視点が重要であることを再確認することができた。

VIII 総合考察

共通のプログラムを導入し、「観る視点」を共有することで、保育者の「意識」が変化し、「保育の質向上」に寄与するのではないかと考え、本調査を実施した。今回は運動プログラムに特化し、1年間取り組んだ。共通の研修を受けて取り組んだことにより、「子どもを捉える視点が変わった」「環

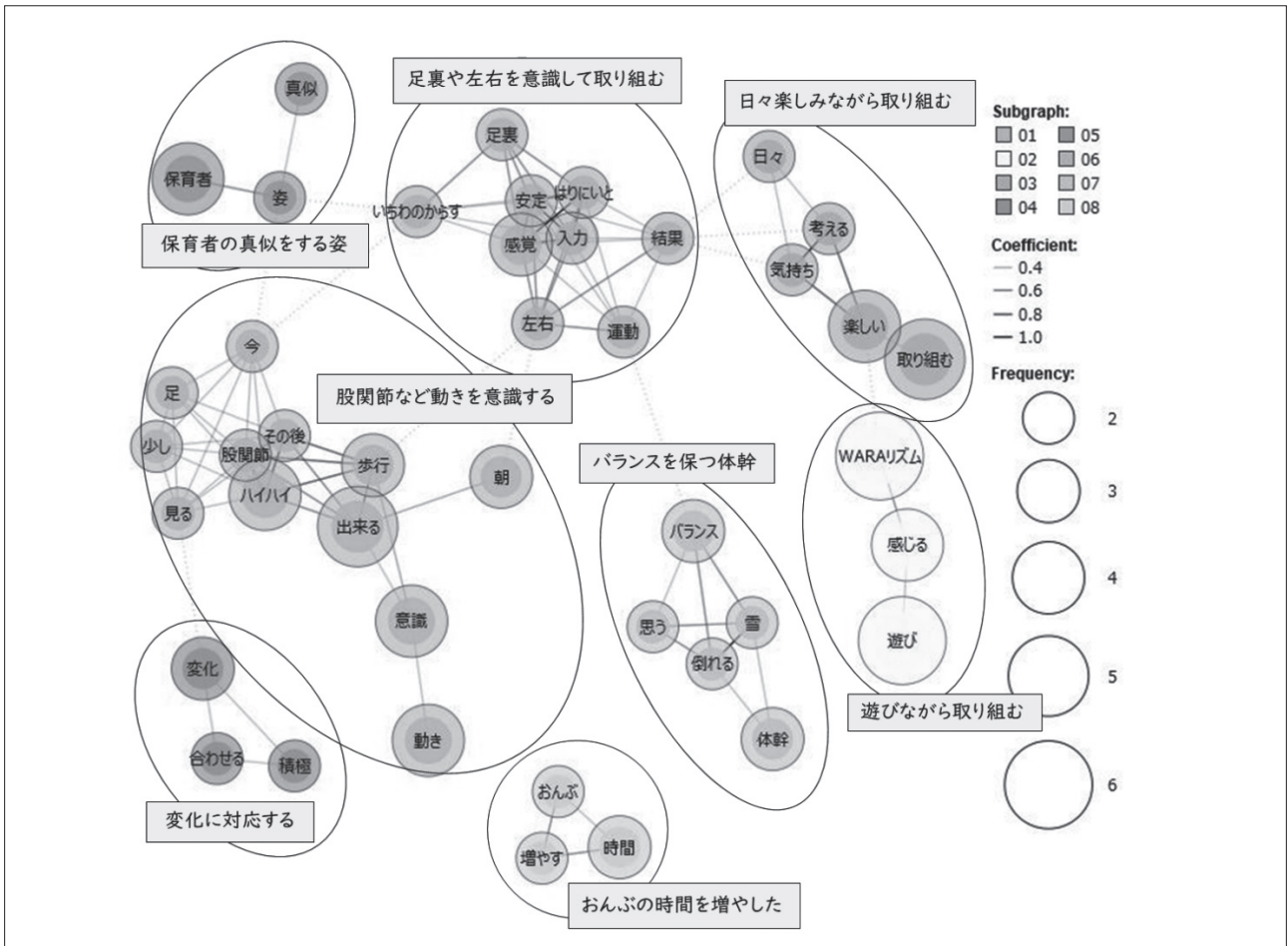


図7 WARAIリズム®にどの様に取り組んだか (共起ネットワーク)

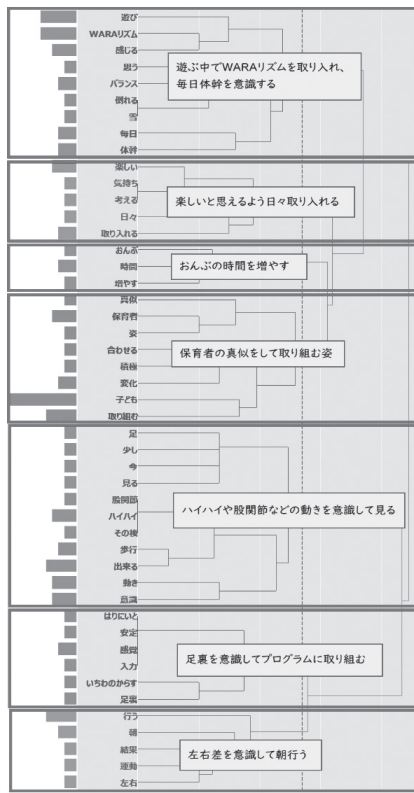


図8 WARAIリズム®にどの様に取り組んだか (クラスター分析)

境設定を考えるようになった」「運動プログラムが立てやすくなった」という結果を得ることができた。この結果から、保育を振り返る視点を得たことによって、自分自身の保育を振り返るきっかけになっていることが明らかとなった。更に、「保育士間での連携が取りやすくなった」「仕事にやりがいを感じ、保育に自信がついた」と回答した保育者が多く、働きやすさに加えて、自分自身の仕事について、自身で肯定的な評価することができるようになってきていることが明らかとなった。

厚生労働省は、2020年3月に保育所における自己評価ガイドラインを作成している。保育所における自己評価ガイドラインには「保育士等による保育内容等の自己評価」について、保育士等が子どもの理解を踏まえ自らの保育の計画と実践について行う評価の基本的な流れを「記録」→「子ども理解」→「計画と実践の振り返り」→「改善・充実に向けた検討」→「指導計画等への反映」の循環であるとしている。この繰り返しを行うことにより、保育士等の資質・専門性の向上があるとしている。この循環において、「子ども理解」は

非常に重要であり、まず「子ども理解」の視点を持つことが必要であると考え。今回の調査ではWARAリズム®運動プログラムがこの視点となっているが、このような共通の視点を持つことで、保育者の意識が向上したという結果からも、子ども理解の視点を持つことの重要性がわかる。

さらに、子どもの身体の育ちのポイントを意識して関わることにより、「足の裏を意識して見る」「股関節などの動きを意識して見る」「左右差を意識して行う」というように具体的な視点を持って保育に取り組んでいることが明らかとなった。自分自身が実践する保育の中で、細かい視点を持つことが、保育の振り返りを行う際にも役立つと言える。

前述の保育所における自己評価ガイドラインの中には、自己評価に当たって大切にしたいこととして3点挙げている。

- ①自己評価の基盤となる「子ども理解」
- ②日々の保育に手ごたえが生まれ、保育がより楽しくなる評価に
- ③互いに肯定的な理解と評価ができる職場の環境づくり

これらの点からも、今回導入した運動プログラムによる保育実践や、振り返りは効果があったのではないかと考える。

Ⅹ まとめ

保育者が共通の運動プログラムに取り組み、子どもを観る視点を可視化することによって、保育者同士の協働が円滑に進み、子どもの身体発達の状況についても把握しやすくなるのではないかと考え調査を実施した。結果、保育者同士の連携も取りやすくなり、自分自身の保育について詳細な振り返りが可能になることが明らかとなった。

子ども理解の視点を可視化することは、保育者の意識に変化を与え、保育の質向上に寄与する可能性が高いと言える。このことから、自分自身の保育を振り返る視点を可視化することの重要性が確認された。

Ⅹ 本研究の限界と今後の課題

本研究は、運動プログラムに特化した内容であったため、保育全体の質向上とまでは言い難い結果と言える。今後は身体づくりのプログラム以外の

子ども理解の視点についても検討していく必要があると考える。

謝辞

コロナ禍においてお忙しい中、本調査にご協力いただいた保育者の皆様にお礼申し上げます。本研究は、千里金蘭大学奨励研究の助成を受けて実施した。

引用参考文献

- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析. ナカニシヤ出版.
- 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会 (2020). 議論の取りまとめ「中間的な論点の整理」における総論的事項に関する考察を中心に. 厚生労働省.
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説. フレーベル館.
- 岸本みさ子・高内正子 (2021). 西宮市の乳幼児の心と身体健康調査 その1. 日本幼少児健康教育学会第39回大会【春季：加須大会】抄録集. オンライン開催. 2021年2月27-28日
- 岸本みさ子・高内正子 (2021). 乳幼児の心と身体健康調査-その2- N市内の保育所における調査から. 日本幼少児健康教育学会第40回大会【秋季：岡山大会】抄録集. オンライン開催. 2021年9月4-5日
- 子どものからだと心・連絡会議編 (2021). 子どものからだと心 白書2021. 子どものからだと心 白書連絡会議.
- 文部科学省 (2012). 幼児期運動指針.
- 田島大輔 (2019). 保育における振り返りのプロセスについての一考察-子ども理解・対話・可視化に着目して-. 秋草学園短期大学紀要36号 p.166-175.
- 上村晶 (2022). 保育者と子どもの関係性を可視的に描く意義. 桜花学園大学保育学部研究紀要第26号. p.9-23.
- 上山瑠津子・杉山伸一郎 (2021). 保育における子ども理解を可視化する実践支援. 保育学研究第59巻第3号. p.11-22.